

### Ⅲ 研究の視点

#### 1 教材

##### (1) 学習意欲の向上をめざした思考力・判断力・表現力を育成する教材

これまでの授業は、教科書や副読本に示された教材・題材に基づいて、与えられた内容を教えるというものが多かった。しかし、教材とは達成したいねらいと子どもや時代のニーズに即して、授業者がより望ましいものを開発する必要がある。同時に、教材を媒介として、社会科の授業を積み重ねていくことによって、「思考力・判断力・表現力」を育て「学習意欲を向上」させていくことができると考えられる。

では、研究主題に基づく「教材」とは、どのようなものが考えられるだろうか。

一つ目は、「地域や時代の課題を克服するために工夫・努力・協力していった問題解決の姿」である。具体的には、「太田川放水路の建設」や「広島復興」などが考えられる。この教材は、人々が実際に課題を克服した姿を取り上げていることから、地域やその時代が抱えた課題を乗り越えていく人々の姿を通して、社会の在り方を考えるというものである。このような教材を取り上げることによって、目の前の課題を解決しようとする知恵と意欲を学習するとともに、地域をよりよくしようとした人々の姿から、地域に対する誇りをもつことができる。

二つ目は、「地域密着型の地域教材」である。具体的には、「お好みソース」や「セツブソウ（庄原市総領町）」などが考えられる。これは、その地域らしい素材を取り上げ、身近なところから社会を考えるというものである。これによって、子どもの主体的な学習を展開することができるとともに、地域に対する愛情を育てることにつながるができる。

三つ目は、「今日的な課題を解決していこうとしている人々の新しい問題解決の知恵」である。具体的には、「東北地方のかき業者への支援」や「環境問題への取組」などが考えられる。これは、現在抱えている社会的な問題や論争となっている問題を取り上げ、これを解決しようとする人々の姿から、解決策を考えるというものである。これによって、今日社会が抱えている課題に対する関心と解決しようとする意欲をもつことができる。また、人々の解決に向けての取組を通して、人々の問題解決の知恵を学習することができる。

ここでは、三つの教材について具体的な例を取り上げ、教材の特徴と研究主題・副題との関わりについて考えてみることにする。

##### ① 地域や時代の課題を克服するために工夫・努力・協力していった問題解決の姿

###### 第6学年「ヒロシマの復興」

###### ア 教材について

広島は、原子爆弾により壊滅的な打撃を受けた。復興の計画を立てるものの、なかなか計画通りには進まなかった。それは、原爆の被害による人口の激減や企業などの壊滅によって、十分な税収が得られなかったためである。しかし、当時の浜井広島市長らの尽力により、広島市を平和のシンボルとして、国を挙げて建設することが位置付けられた、広島だけに効果のある広島平和記念都市建設法が国会で可決された。

復興は市政のみに任されていたわけではなかった。例えば、広島市民球場は、広島

市民の「大きな球場が欲しい」という声からつくられたものである。広島市民球場は、広島市の財界人が建設を計画し、財界からの寄付や広島市民による募金によって、建設資金を集めた。また施設用地は、平和記念都市建設法によって、国有地だった中島公園の一部を国から無償で譲り受けたことで、建設が実現した。

#### イ 教材と研究主題・副主題との関わり

この教材は、税収の減少によって、広島市民の思いや願いを実現できないという問題に直面しながらも、国からの支援に解決策を求め、特別法を制定できるように努力し続け、広島市民の思いや願いを実現しようとした当時の人々の姿を示している。

市民自らの参画により、自らの手でよりよい広島を築こうとする市民の姿から、県や市という地方公共団体や国という行政だけに任せるのではなく、自らが主体者となり、それを実現するために行動していく必要があること、市民と市政が両輪となって地域発展に貢献していく必要があることを学ぶことができる。まさに、「未来を問い続ける」学習ということができると考えられる。

### ② 地域密着型の地域教材の具体例

#### 第4学年「セツブンソウ（庄原市総領町）」

##### ア 教材について

セツブンソウは、現在その姿を見ることはあまりなく、環境省・広島県指定準絶滅危惧種になっている。

セツブンソウは、春先に芽を出し、5月頃には結実して地上は枯れ、地下の塊茎で翌春まで眠りにつく。その間、他の植物が生い茂ったり、他の草が枯れて積もったりすると次の春に芽を出すことは難しくなる。さらに、この花は南向きの日当たりの良い斜面より、北向きの斜面を好む傾向がある。

こうした生態に適した地域が庄原市総領町である。総領町は、山中の狭小な谷間に集落が点在し、耕つく地の確保が難しい土地であった。その結果、耕つくに適した日当たりの良い土地は田畑になり、山すそや日当たりの悪い斜面などに住居や墓地が作られた。

人が住んでいれば、少なからず手入れが行われるが、他の地域では、田畑を耕す人がいなくなり、荒れていくとともに姿を見せなくなった。一方、総領町では、セツブンソウが好む、決して好環境とはいえない土地に人々が住まわざるを得なかったことで、セツブンソウは、生き長らえることができた。その結果、総領町は、セツブンソウの日本有数の自生地となったのである。

現在では、セツブンソウという地域の資源を守るために、土地所有者の管理だけではなく、「節分草保存会」というNPO法人を設立し、定期的な草刈りや電気柵の設置を行っている。毎年3月には、自生地を公開したり、「節分草祭り」を開催し、栽培したセツブンソウを販売したりしている。

##### イ 教材と研究主題・副主題との関わり

「なぜ、総領町でセツブンソウが広く残っているのか。」という問いを追究していくことで、先人の農地の工夫、努力してセツブンソウを守る人々の思い、農村の過疎化・高齢化問題、里山の活性化策まで学ぶことができる。それは、農業の衰退と農村の過疎化という、現在の日本各地で起こっている問題を反映している。この学習を通して、今日抱える問題を解決する知恵を学ぶことができると考えられる。

地域の教材を取り上げることは、親近感をもち、自らの地域の課題を主体的に学習することができる。さらに、自らの経験を根拠にして、思考、判断をすることも可能になる。このような活動を通して、地域に対する愛情を育むことができると考えられる。

### ③ 今日的な課題を解決していこうとしている人々の新しい問題解決の知恵

#### 第5学年「わたしたちの生活と環境(太田川のシジミを取り上げて)」

##### ア 教材について

太田川は、広島市内の中心部を流れ、広島湾に注ぐ河川である。広島市民のみならず、近隣市町村の水がめとして大きな役割を担っている。水の確保だけでなく、アユやシジミなどの水産物が育つ場ともなっている。

昭和30年代後半からの高度経済成長期に入ると、太田川下流域では、急激に人口が増加し、多くの工場が進出した。これによって、工場廃水や家庭排水が太田川の水質汚濁や富栄養化をもたらし、底質のヘドロ化が進んでいった。

度重なる洪水被害への抜本的な対策として、昭和42年には、太田川放水路、昭和49年には、高瀬堰が建設された。これによって、水量が減少し、汚濁原因物質（窒素・リンなど）が停滞しやすくなることとなった。

一方、シジミは、汽水域の砂地に好んで生息するため、太田川の最大の問題であるヘドロ化の影響を強く受ける生物である。その漁獲量の変化をしてみると、昭和40年の300tをピークに急速に減少し、昭和50年にはわずか9tにまで落ち込んだ。

こうした事態に対して、広島市では、生活排水が直接河川に流入しないように努めてきた。太田川河川事務所や広島市内水面漁協などが主体となって、植林活動や清掃活動に取り組んだり、ヘドロの減少に効果があるとされる石灰や微生物をまいたりして環境改善を図ってきた。市民にも、太田川の環境改善への意識が高まり、自治体が開催する清掃活動や親水事業に多く関わっている。

##### イ 教材と研究主題・副主題との関わり

シジミの減少に見られる太田川の環境悪化は、よりよい生活を求めすぎた結果、起こった環境問題であると考えられる。そこには、河川改修工事による「洪水対策」と「環境悪化」というジレンマを抱えた背景がある。これは、広島市のみならず、日本各地で起こった環境問題と背景を同じくしている。

子どもにとって、身近な環境問題を取り上げることは、学習意欲を喚起する上で重要な役割を果たす。意欲だけではなく、自分の身近な生活と環境問題を結び付けて考えることも可能となる。そして、太田川の環境改善に取り組んでいる人々の活動を通

して、地域社会に参画する必要性を感じることができると考えられる。これらのことから社会科の学習そのものへの意欲と同時に、社会へ参画する態度の基礎を培うことができると考えられる。

## (2) 素材から教材へ

では、教材は、どのようにして教材へと整理されていくのだろうか。ここでは、その手順の一例を示すこととする。

### ① 目標の明確化と教材の選定

目標とは、その授業における明確なビジョンである。社会科では、事象からどのような社会を認識させ、どのような力を付けるのかということとなる。授業の方向性を決めるのは、目標であり、目標を焦点化することによって、学習内容が明確になり、それに適する教材が選択されるのである。目標に基づいて教材が設定されるのであって、教材ありきの授業では、目標も内容も不明確となる。

目標を定める際によりどころとすべきものは、学習指導要領

である。学習指導要領に規定してある内容を鑑み、その授業の目標と教材を設定することになる。

一方、学習指導要領には、盛り込まれていない事象も考えられる。指導要領に規定してある題材のうち、地域に根差したものや現在、まさに起こっていることから授業をつくることも考えられる。空間的・時間的な身近さをもった素材を見付け、教材とすることによって、授業者が日々の生活の中で出会った考えさせたい事象や教えた、伝えたい内容に基づく、授業者独自の主体的な授業づくりとなる。

上述の第4学年「セツブンソウ（庄原市総領町）」を例に考えてみたい。学習指導要領には、地域資源を保護・活用した特色ある町づくりや観光などの産業の発展によって、地域の活性化に努めている事例から、県の特色ある生活について考えることが規定されている。広島県は、人口が多く、産業が発達した都市部と比べて、山間部は、高齢化や過疎化から地域の活性化が課題となっている。

このように、学習指導要領の内容と現代社会の実態を考慮して目標を設定し、それを達成する題材として、地域教材であるセツブンソウをめぐる総領町の取組が適していると考えられる。

### ② 教材の構造化

授業の目標とそれに基づく教材が決定すると、そこで教えるべき内容が明確となる。

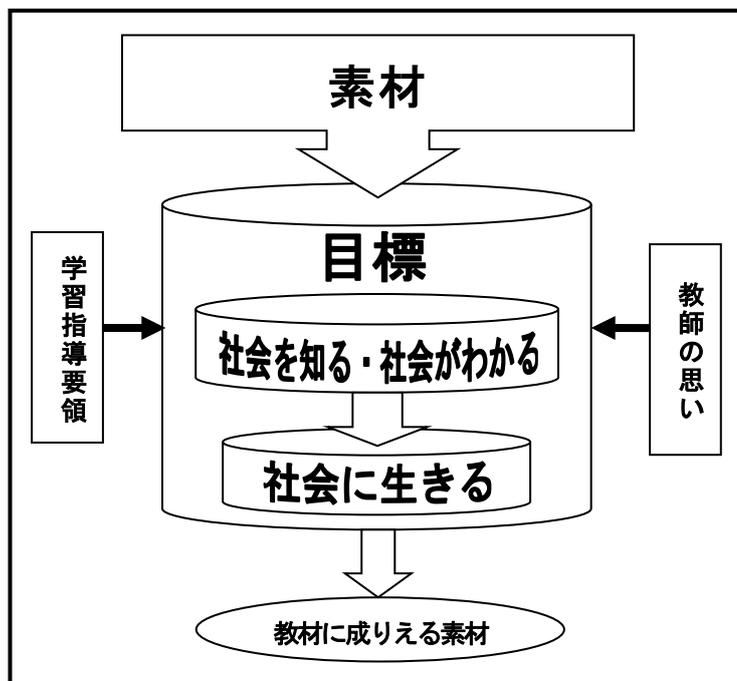


図1 素材選定のイメージ

教材は、それぞれの内容の関係から、構造的にとらえる必要がある。それは、社会科の授業で扱う実社会が、様々な事象の結び付きによってできているからである。新学習指導要領においては、社会認識をする際に、事象と事象の関係を考えたり、関連付けたりすることが求められている。したがって、その教材がもつ事象の関係を明確にすることによって、その授業で何を教えるのかが明確となる。そこに教材を構造的にとらえる意義がある。

## ア 対比的な構造でとらえる

下の図 2-1 は、「ヒロシマの復興」における取組を「広島市民」、「広島市（行政）」の側から迫り、時系列で見ていくことによって、どの時代も市民・行政が協力してよりよい社会を創ることを示している。

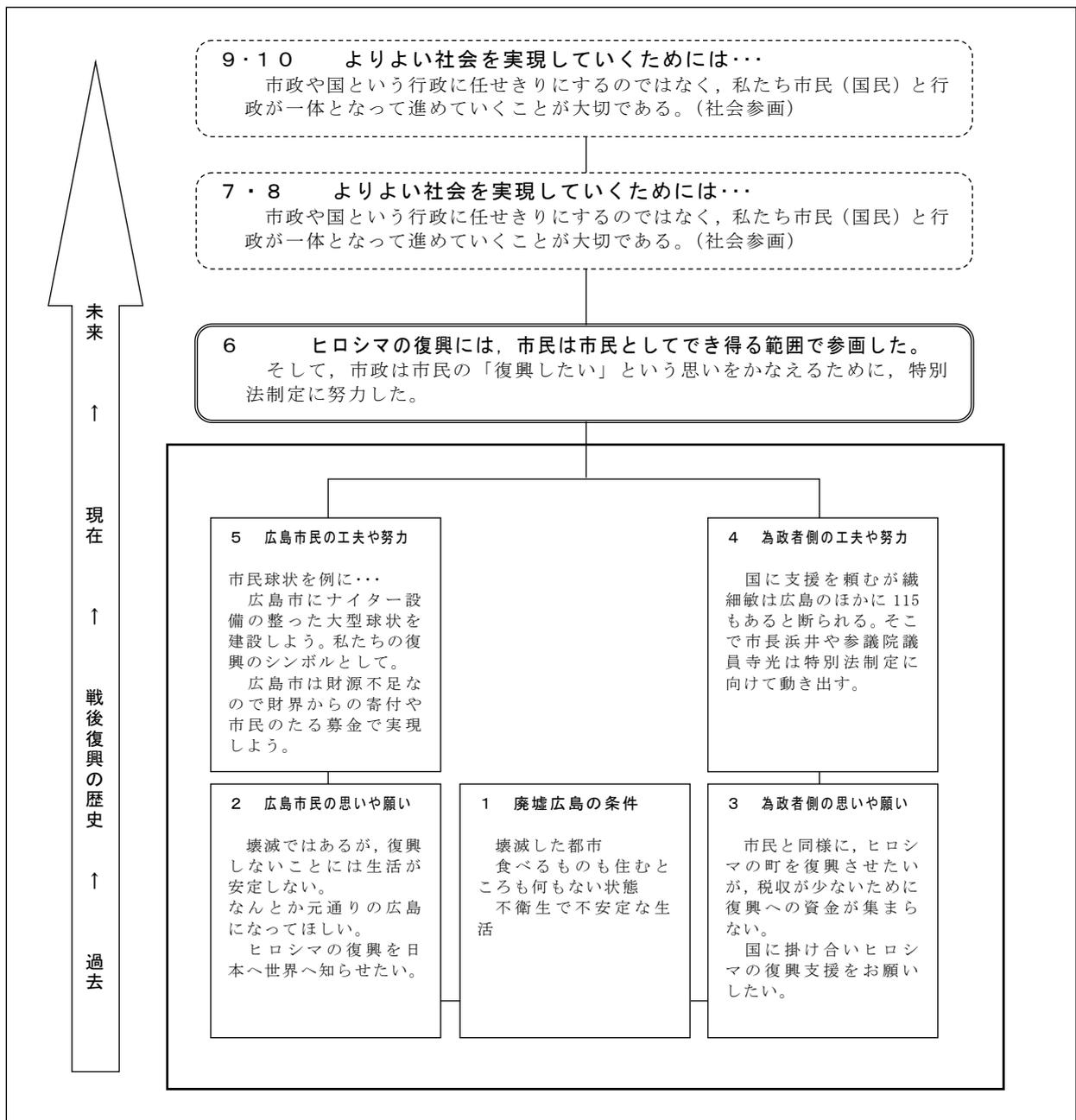


図 2-1 「ヒロシマの復興」教材・内容の構成

この図を通して、広島復興に関わる事象や内容のつながりが見えてくるとともに、この授業におけるねらい・主題を明確にすることができる。また、この構成が広島復興が進んでいくストーリーとなり、この流れがそのまま単元構成となる。

### イ 因果的な構造でとらえる

下の図 2-2 は、「セツブンソウ（庄原市総領町）」において、総領町でセツブンソウが広く残った理由が総領町の環境と総領町の人々の努力から成り立っていることを示している。そして、それを時系列で配置することによって、過去の総領町やセツブ

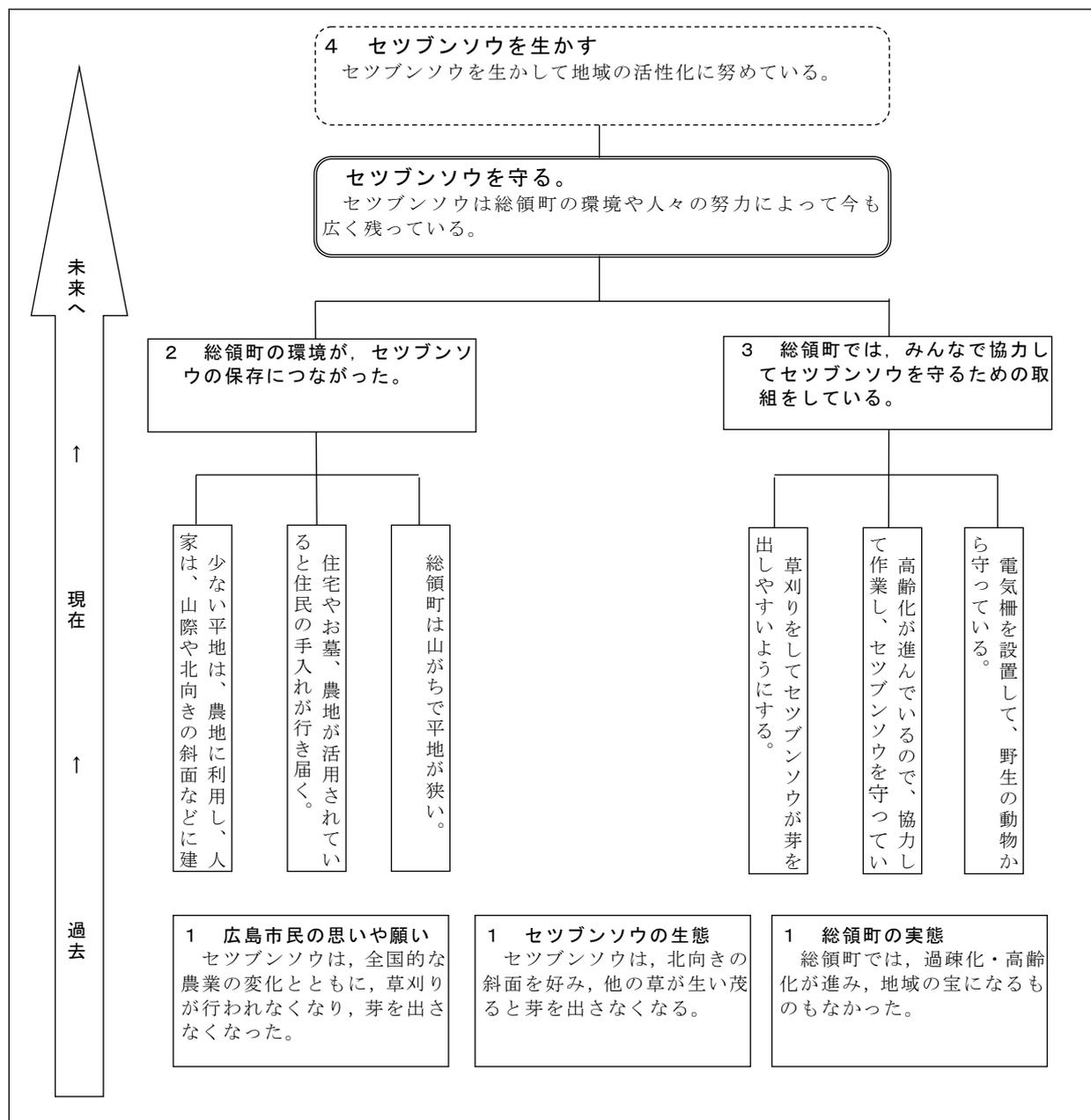


図 2-2 「セツブンソウのまち総領町」教材・内容の構成

## ウ 帰納的な構造でとらえる

次の図 2-3 は、「スーパーマーケット」、「コンビニエンスストア」それぞれの特徴や工夫を挙げ、それらすべてが商店それぞれの客を引きつける戦略であることを示している。いろいろな事実を集約して見えてきたことから、その本質を見出すという帰納的な構造が考えられる。

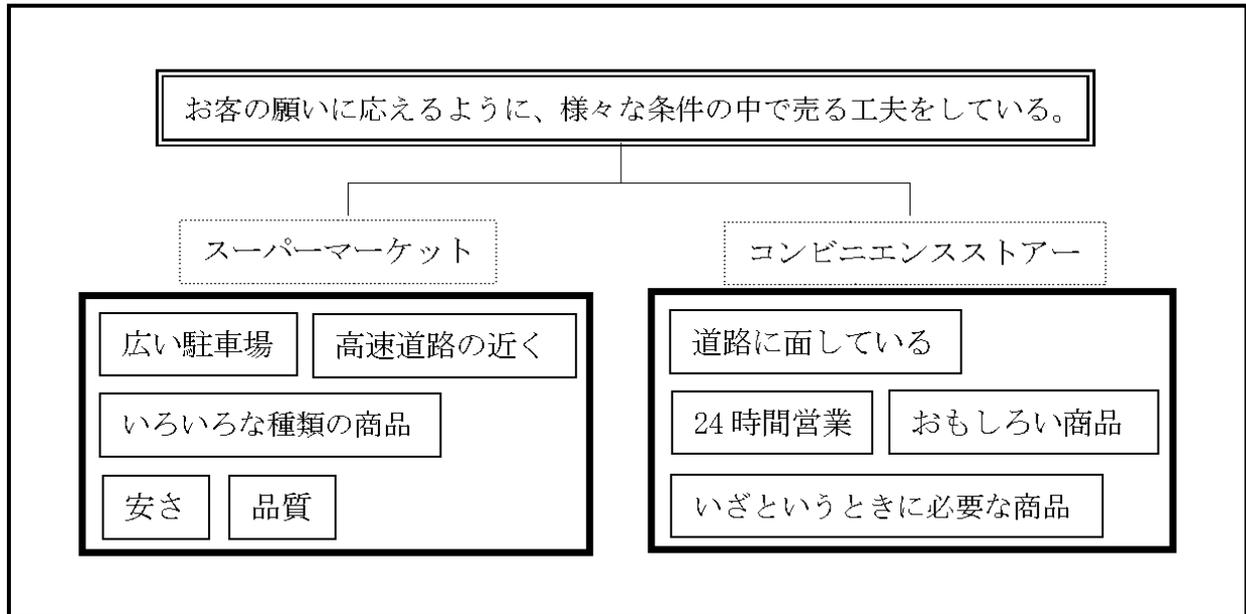


図 2-3 「わたしたちの暮らしと商店の仕事」教材・内容の構成

この例から分かるように、構造図は、一つ一つの事象の関係や関連付けから見えてくる、社会の有り様やそれらを包括的にまとめた概念から成り立っている。同時に、考えさせたい事象から、目標達成するための一つ一つの内容を見出し、そこから見えてくる社会とは何かを明らかにしているといえる。

これらは、教材開発における授業者側の思考のプロセスとなっている。このプロセスを反映させる形で、授業が展開されるはずであり、それは学習者側の思考のプロセスともなるはずである。

教材を構造的にとらえることによって、単元の中心発問や一時間の授業の目標、板書を構造的に計画することまで、容易になると考えられる。

### ③ 教材を授業へ

構造的に教材をとらえたら、目標に沿って単元計画を立てることとなる。

単元計画で最初に行うのは、最終的に学ばせたい内容、つまり教材の構造における最上位概念を理解目標として定め、それに対する発問を学習問題として据えることである。それを追究していく形で単元計画が構成される。見学や資料収集などを組み込むこともあるが、どの時間でどの事実を獲得させたり、思考させたりするのかを明確にしておきたい。これは、探究的な学習を行う場合の基本的な形になる。

具体例を基に考えてみる。「セツブンソウ（庄原市総領町）」の学習で、セツブンソウが地域の自然環境に適合するとともに、人々の思いと努力によって守られてきたことを学ばせたいと考えると、「なぜ、セツブンソウは広く残っているのか」という単元を貫く学習問題が立てられる。

すると、導入では、セツブンソウの生態や準絶滅危惧種に指定された経緯を知り、総領町で広く残っていることに疑問を抱くようにしなければならなくなる。「ふかめる」場面では、総領町の航空写真などと、セツブンソウの生態を結び付けて、

セツブンソウにとってよい環境が残っていたこと、人々の思いと努力によってセツブンソウが生き続けてきたことに気付かせる必要性が出てくる。さらに、単元の最後に、総領町の人々がセツブンソウを生かしている取組を調べる活動や、自分なりの生かし方を考えるなどの活動を設定して、未来を問い続ける姿勢を養えるように構想するのである。

このように、単元を貫く学習問題→結論という骨組みがしっかりしていると、一時間の授業やそこで獲得すべき内容は、おのずと決定してくるのである。

以上のように、単元の構想を練ったら、一時間一時間の授業の目標と内容を考え、順序を検討して単元計画を立てていくのである。

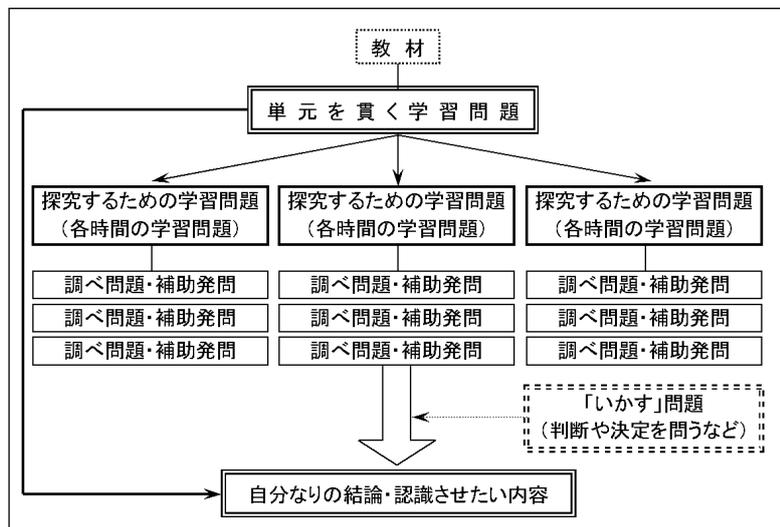


図3 発問の構造